

優秀賞

テーマ…未来のための今を生きる
「光を放つ人」

広島県・盈進高等学校1年 後藤 泉稀

「私は「害」じゃない」。真由美先輩の言葉が私から離れない。だから私は、「障害者」と表記しない。いや、できなくなった。

彼女は私より20歳年上のクラブの先輩。難聴だ。発音が人と違う。でも、それがいい。それが先輩。そして誰もが、明るくて優しい彼女を敬愛する。彼女がいるだけでみんな元気になる。私たちは彼女を「太陽」と呼ぶ。

誰もが「障害者」と言う。私も真由美先輩に出会うまでは無自覚に使っていた。自分の言葉が誰かを傷つけていたことにはつとにした。

7月、「相模原殺傷事件」が起きた。「障害者は生きる価値がない」と。あまりの衝撃で今でも思い出せば体が重くなる。「やまゆり園」の利用者ご家族、職員の方々のことを思うと、その苦痛は想像するに余りある。

「遺族 抱える生きづらさ」『毎日新聞』2016年9月14日)の一節が痛すぎた。「親戚ですら、一緒に食事するのを嫌がった。施設に面会に行つてあげると頼んでも誰一人面会には行つてくれなかった」。

私のいとこは、発達障がいがある。現在、小学1年生。成長が遅い。言葉は上手く話せない。公共の場で大きな声をあげてしまう。食事もお風呂も家族や他者の協力が要だ。でも、私はいとこが大好きだ。普通にじゃれ合つて遊んだり、一緒にご飯を食べたりすることはとても楽しく、幸せを感じる。

真由美先輩は、高校時代から自分の障がいを隠さなくなった。それは、ハンセン病療養所の訪問がきっかけだった。「つい予防法」(1996年廃止)による絶対隔離政策によって、家族、故郷、名前など、人間の尊厳を奪われた入所者の壮絶な人生に接したのだ。彼らは、強制労働をさせられ、手足や顔に重い後遺症を残し、身体が不自由でもなお、人間としての尊厳と人々を思いやる優しさを放っていたのだ。先輩は、

彼らと自分を重ねて決心した。「耳が聞こえないことなんか大したことじゃない。私はありのまま生きる」。

そんな彼女も言葉を獲得するのに大変な苦勞をした。自立のため、先輩の母親は心を鬼にし、時にはひっぱたいて訓練したという。

私も先輩と一緒に療養所を訪問し、入所者と継続的に交流している。もう15回ほど訪ねた。私は、彼らの人生を聞き、語らうことが大好きで、彼らを心から尊敬している。萎えた手を握ると、命の泉を身体いっぱいと感じられる。後遺症で緩んだ口元からよだれが垂れるが、それをタオルで拭うのも、私には、彼らから「人はどう生きるべきか」を教わっていることのように感じる。それは、近隣の知的障がい者施設で交流するときも同じだ。

いとこの障がいが分かったとき、家族のなかに「この先どうなるのか。かわいそうに」という声もあった。率直な気持ちだろう。でも私は「かわいそう」とは思わない。

真由美先輩は続けてこう言った。「障がいは不便だけど、私は不幸じゃない」。

ハンセン病療養所では、子どもをつくる権利も奪われた。国は、母体保護のため、あるいは養育困難などを理由とした。男性には断種を、女性には墮胎や人工妊娠中絶を強いた。今なら誰もが異常と思えるこれらの行為が通常に行われていた。普通の看護婦が普通にやった。

どうしてだろうか。私はそこに、人間の差別意識が潜んでいると思つつまり、自分は救う側、患者(入所者)は「かわいそう」で救われる側という固定観念だ。この観念は、救つてあげる「意識」が強いほど、その人のためによかれと思つてやっている自分が「正しい」と思いこませるように作用する。だから、この意識を私たち一人ひとりが自覚しない限り、第二の「相模原殺傷事件」が起きない保障はない、と私は思つ。

「障害者」とひとくくりで見える視点も改めたい。みんな違ってみんないい。人それぞれに、家族それぞれに、尊い人生と空間がある。

私の世界に「障害者」は存在しない。彼らは、私にとっては、光を放つ人のことである。